

【人文科学部門 共同研究】

イスラエル国テル・レヘシュ新出土初期シナゴークの 考古学的・宗教史学的研究

長谷川 修一	代表研究者	立教大学大学院キリスト教学研究科／文学部	准教授
市川 裕		東京大学大学院人文社会系研究科	教授
桑原 久男		天理大学文学部歴史文化学科	教授
津本 英利		公益財団法人古代オリエント博物館	研究員
橋本 英将		天理大学文学部歴史文化学科	准教授

2017年8月、イスラエル国北部ガリラヤ地方に所在するテル・レヘシュにおいて、ユダヤ教初期シナゴークの発掘調査を実施した。調査の結果、シナゴークの全体が出土し、建築的特徴や出土遺物から、同シナゴークの築造が紀元1世紀である可能性が高いことが判明した。

紀元1世紀は、エルサレムにあったユダヤ教唯一の神殿がローマ帝国によって破壊され、ユダヤ教そのものに大変革が迫られた時代であった。また、この時代は、ガリラヤ地方のシナゴークを中心に宣教活動を行ったイエスを創始者と仰ぐ初期キリスト教がユダヤ教を母体として誕生し、展開した時代でもある。

今回出土したテル・レヘシュのシナゴークは、二つの一神教的宗教にとって重要な時代における、ユダヤ共同体とその思想の解明に重要な考古学的資料を提供するものである。

例えば、同シナゴークの入口の位置がエルサレムの方位になかったことは、同シナゴークがユダヤ教の神殿を補完する目的で築造されていたこと、すなわち、神殿の代替機能をまだ有していなかったことを示すものであり、従来の学説を実証的に補強するものとなった。

今後、世界中の研究者から本研究の成果が参照されることが期待される。

インド中期密教におけるマンダラ観想法の研究 —9世紀の密教僧アーナンダガルバの著作を中心として—

伊集院 葉 東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程

本研究は、ヨーガタントラの師として名高い学僧・アーナンダガルバの著作の読解を通じ、インド中期密教における宗教的实践、とりわけ密教行者が行う、マンダラ（仏・菩薩の集合図）を用いた観想法のあり方を解明することを目的とする。具体的には、アーナンダガルバの『サマーヨーガ・タントラ』に基づく儀軌書『金剛火焰出現』の校訂と訳注の作成を行い、その上で、同じ著者による『初会金剛頂経』に基づく儀軌書『一切金剛出現』『降三世マンダラ儀軌』と比較し、儀軌の内容・構成について考察する。

得られた結果は以下の通りである。(1)『金剛火焰出現』は『サマーヨーガ・タントラ』の儀軌であるにも関わらず、三三昧中の第一瑜伽にあたる箇所については、むしろ『一切金剛出現』『降三世マンダラ儀軌』同様、『初会金剛頂経』系の行法を用いている。(2)『金剛火焰出現』の同箇所に「ヨーガ」「アヌヨーガ」の語が見出されることから、アーナンダガルバは、『秘密集会タントラ』聖者流のような、第一瑜伽三昧に四段階を設ける立場を取っていた可能性がある。(3)『金剛火焰出現』の後半部分は『サマーヨーガ・タントラ』に依拠した行法から成り、同タントラからの引用は、第6・8・9・10章から、計17箇所に確認された。

常盤大定旧蔵ガラス乾板の化学修復と整理保存事業

大野 晃嗣 東北大学大学院文学研究科 准教授

本研究は、大正・昭和期の仏教学者であり、中国仏教史研究の開拓者として著名な旧東京帝国大学教授常盤大定が、1920年（大正9年）から1929（昭和4年）にかけて、中国大陸において五回にわたる仏教史蹟の調査を行った際に撮影した九百枚を越えるガラス乾板に対して化学修復を行い、長期保存に耐える学術資源として整理した後、焼き付けとデジタル化を施し、そして学界への公開を企図するものである。

期間内においては、本ガラス乾板に対して、銀汚染、カビ、バクテリアの除去を施し、また圧着したガラス乾板の剥離にも取り組んだ。その結果として、凡そ四百枚に及ぶガラス乾板に対して適切な化学的修復を施すことができ、1920年代の中国仏教史蹟の姿を伝える貴重な画像を保存することができた。今後、『支那仏教史蹟』に利用されていない写真を把握し、それぞれの画像の場所を特定する。そして、今回は達成しきれなかった紙媒体による焼き付けを行うことによって、極めて重要な学術資源として、多くの分野の研究者に利用できるようにしたい。

オスマン朝宮廷の幕営空間に関する歴史学的研究

川本 智史 ハーヴァード大学アガカーンプログラム 客員研究員
(現 金沢星稜大学教養教育部 専任講師)

前近代ユーラシア世界ではテュルク・モンゴル系王朝が、しばしば遊牧民の軍事力を背景に広大な地域を支配する王朝を建設した。彼らは首都を建設しても多くの場合郊外に設営した大天幕群において宮廷を営み謁見や宴会などもここで起こった上、統治や軍事的な必要から領内を頻繁に移動したため、天幕群は宮殿以上に重要な宮廷施設であった。

本研究は宮殿建築との比較を通して、同じくテュルク系のオスマン朝宮廷の天幕群の性格と起源の考察を目的とするものである。その結果、天幕が宮殿に読み替えられたという従来の見解とは逆に、既存の宮殿空間や建築が天幕のモデルとなったことが示唆された。先行する遊牧王権の天幕群と比較すると次の点でオスマン朝天幕群は特異である。ひとつには君主の玉座が据えられたのが天幕内ではなく、大天幕前の庇下であった事実で、これは明らかに15世紀初頭に登場した新式宮殿の様式を踏襲する。もうひとつは祝祭などを観覧する君主専用の高層楼台「正義の塔」の存在で、これもトプカプ宮殿の同名の建造物を模したもので、その起源は14世紀以前の宮殿建築で一般的だった楼閣にまで遡る。オスマン朝は首都イスタンブールの宮殿を統治の核としたため、他の王権とは異なる天幕群を構築したと推測される。

ティムール・サファヴィー朝期イランの工芸とペルシア語文化 —シンシナティ美術館所蔵《伝イマーム・レザー廟旧蔵墓用覆布》 (所蔵番号：1953.124) の考察を中心に—

神田 惟 日本学術振興会 特別研究員 (DC1)
／東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学コース 博士課程3年
(現 東京大学東洋文化研究所特任研究員・教養学部 非常勤講師)

本課題は、①15世紀後半から18世紀初めの歴史的イランに比定される陶製品、金属製品、テキスタイルのペルシア語詩銘文のカタログ・レゾネ、及び、②当該時代・地域の工人（詩作を得意とする工人を含む）の伝記や、彼らの営為そのものに係わる記述を有する同時代一次史料の総目録の作成と分析により、「ティムール・ルネサンス」期以降の歴史的イランにおける工芸と詩との密接な関係の実証を目指す、美術史学的研究である。①、②の作成・分析は現在なお進行中であるが、これまでに、プロの詩人として名を馳せた人物が建築物や工芸品に施されるペルシア語韻文銘文の制作に積極的に関与していた事例に加え、工人として生計を立てている人物が自作の詩を自身の作品に銘文として施した事例についても、新たに見出すことに成功した。具体的な作例として挙げたシンシナティ美術館所蔵《伝イマーム・レザー廟旧蔵墓用覆布》(所蔵番号：1953.124)については、イマーム・レザー廟が16世紀において王族の墓地としての機能を兼ね備えていたことを指摘した上で、当該作品の注文に際して、サファヴィー家の傍流に当たるバフラーム家が何らかの形で関与していたのではないかという仮説を提示した。

空海の遺志を継ぐ者たち：江戸時代の「根本説一切有部律」研究

岸野 亮示 京都大学大学院文学研究科 非常勤講師
(現 大谷大学 任期制助教)

インドからチベット文化圏と漢字文化圏の双方に伝わった唯一の戒律テキストとして学術的な注目度が高く、また日本においては、空海(774-835)が、ひそかに重視したことで仏教界に少なからず影響を与えている「根本説一切有部律(こんぼんせついつさいうぶりつ)」という仏教正典の包括的な研究の実現に向けて、學如(1716-73)ら江戸期の「根本説一切有部律」宣揚運動に関わった学僧たちの著作のうち、特に「根本説一切有部律」の解説に直接関わるテキストに焦点をあて、その所在を確認すること、そして、現存するものに関しては、その概要を明らかにすることを目的に、學如が住職を務めた金亀山福王寺(広島市可部町)において、現存する関連資料の調査をおこなった。そして、関連資料13点を確認・実見した。さらには、その一つである『小部類集』という表題の小篇テキスト集成をとりあげ、その第一番目の「律蔵目録」という律文献の目録の内容を吟味することで、學如ら江戸期の「根本説一切有部律」徒が、同律に関してどのような理解を示していたかを考察した。

サーサーン・ガラスはどこで作られたのか —イラン北部に流入したカットガラスの製作地を求めて—

四角 隆二 岡山市立オリエント美術館 副主査学芸員

サーサーン・ガラスは、考古学研究に必要な付帯情報を喪失した「美術品」に依拠した研究が継続されてきた結果、定義が不明確だった。21世紀に入り、分析化学との共同研究が進展した結果、成分組成によって、いわゆるローマ・ガラスとの区別や、年代による変遷が明らかにされるようになった。本研究は、考古学と分析化学の共同研究により、研究者間の意見が一致しない、製作地の問題に取り組んだ。

実施したのは、サーサーン・ガラスの製作工房が所在したと考えられているキシユ遺跡(イラク)出土資料の考古資料研究と、伝イラン北部由来資料(大原美術館蔵)を大型放射光施設SPring-8(兵庫県佐用町)BL08Wに持ち込み、高エネルギー蛍光X線分析を行った。

結果、キシユ遺跡ではメソポタミア都市遺跡で一般的な閉塞器形小型容器(香油瓶)に加え、これまで伝イラン北部由来資料にのみ見られたカットガラスの存在が確認でき、これらがキシユで製作されたものと理解できた。高エネルギー蛍光X線分析では、伝イラン北部由来資料の成分組成がメソポタミア都市遺跡出土資料と起源を同じくするものと判断できた。イラン北部からコーカサス地域でのガラス容器生産を想定するには、素材ガラスの流通を検討する必要があり、両地域をつなぐ地域の情報の蓄積が肝要である。

古代中国の金文鑄造法研究

—レプリカ法・3D解析・鑄造実験による学際的研究の試み—

鈴木 舞 東京大学東洋文化研究所・日本学術振興会特別研究員PD
(現 学習院大学東洋文化研究所 助教)

金文（銘文）とは、古代中国青銅器に幅1mmほどの凹線で鑄込まれた文字を指す。特に殷周青銅器銘文の製作技法については、二百年近くの間議論が続けられてきたが、未だ解明されてはいない。従来の研究が銘文の肉眼観察や拓本資料に基づいていたのに対し、本研究では、泉屋博古館所蔵の殷周青銅器を研究対象として、新たにレプリカ法及び3D解析を導入し、従来の観察では見えなかった点、すなわち銘文凹線周辺及び内面に残された製作痕をマイクロレベルで観察し、また銘文凹線の横断面形状を示すことで、その解明を試みた。その結果、殷後期から西周期にかけて、少なくとも2つの施銘技法の存在が明らかになった。すなわち、銘文の出現期である殷後期には、工具を用いて原型に文字を陰刻した後、鑄型に凸線として転写させて、この鑄型を用いて鑄造することで、器物上では凹線の文字を作り出していた。また、銘文の初現期とは言え、この段階で既に形状の異なる複数の施銘具を使い分けていたことが分かった。殷末期～西周時代には、銘文の長文化に伴い、鑄型を抜かずとも済む新しい施銘法が用いられるようになったと考えられる。

奈良女子高等師範学校に進学した日本統治期台湾の 高等女学校卒業生に関する研究

滝澤 佳奈枝 お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 博士課程

本研究では、奈良女子大学学術情報センターに所蔵されている奈良女子高等師範学校（以下、奈良女高師）に関する史料（以下、「校史関係史料」）から日本統治期台湾の高等女学校を卒業した後に奈良女高師へ進学した台湾人生徒と日本人生徒に関する調査を行い、彼女たちの奈良女高師進学前の出身校・進学（入学）した科・卒業後の進路（着任した高等女学校）を明らかにしようとした。調査は、「校史関係史料」を主とする史料調査と台湾での現地調査の両側面から行いました。台湾では、日本統治期台湾に設けられた高等女学校を戦後に引き継いだ学校を訪問して史料調査を行いました。膨大な「校史関係史料」を時系列に沿って閲覧していくことで、植民地台湾と内地（日本）との間を行き来する台湾人ならびに日本人女子生徒の移動を把握することが可能となりました。本研究を今後の研究活動にも生かし、日本統治期台湾の高等女学校研究に少しでも寄与できるよう一層励んでいきたいと考えています。本研究を遂行できましたのも貴財団による奨励金のお陰と感謝致しております。心より厚く御礼申し上げます。

劉薩訶像表現の時間的・地域的変遷からみる仏教機能の様相

田林 啓 公益財団法人白鶴美術館 学芸員

神異僧・劉薩訶を表す、或いは彼が見出した美術作品を軸として仏教機能の変遷を追った。実地調査を遂行したが、とりわけ、劉薩訶因縁変を描くが、これまで未公開であった敦煌莫高窟第72窟の窟内全体を精査できたこと、そして近年ようやく注目され始めた日本の兵庫県極楽寺蔵「六道図」と白鶴美術館蔵「画図讃文」を精査・撮影できたことには大きな意義がある。併せて共同研究者と共に国際研究会に参加して成果を発表すると共に多分野の研究者と意見交換を行い、研究期間の最後に、以上の成果を一冊の報告書として印刷した。

劉薩訶のどの性質を取り上げて造形化するかということには、各地域、時代によって大きな隔りがある。その表現及び機能としては、次のものがある。即ち、民の不安を癒す引き立て役（地獄の罪人、「六道図」）、民衆統治や民族団結といった上下・横の関係性を強めたり（道宣『続高僧伝』）、聖遺物の発見者、或いは授記、授戒の師として民、土地に正当性を与える仲介者（阿育王塔、涼州瑞像、莫高窟因縁変）、改心して仏道修行に励んだ実践者（『高僧伝』、「画図讃文」）などである。これらは数多の宗教が民との関わりの中で有する普遍的な機能であるが、それを網羅することは彼が中国の民俗信仰の中から生まれた存在であることに由来し、更に、民に正式な戒律を伝達する律宗に大いに取り上げられていったことに因るのであろう。

日中韓近代初期文学の関連様相研究：明治小説の伝播と受容を中心に

竇 新光 神戸大学大学院人文学研究科 博士課程後期課程

本研究課題は、19世紀末から20世紀初頭にかけての中国と韓国における日本明治文学の伝播と受容の様相を考察するものである。当時の日本語原作、中国語訳本、韓国語訳本の1000点以上の書誌情報を調査し、そのデータを用いて明治文学の伝播の特徴に関する全体的な分析を行った。またそれと同時に、『佳人之奇遇』（日→中）、『金色夜叉』（日→韓）、『不如帰』（中←日→韓）、『鉄世界』（日→中→韓）という四つの明治時代の日本作品を選定し、当時の中国と韓国におけるそれぞれの異なる受容様相を具体的に考察した。本研究は、近代初期における東アジア世界の日本、中国、韓国の文学の交流過程・影響関係・関連様相及びそれぞれの特徴の理解の深化に役立つと考えられる。改めて本研究は、三島海雲記念財団平成29年度学術研究奨励金の助成により大きく進展した。2017年11月13日、中国中山大学で開催された第13回日中韓海港都市シンポジウム（「海のシルクロードとアジア海港都市の変遷」）に参加し、研究内容を報告した。ご支援に心より感謝したい。

18-19世紀ロシア帝国統治下の遊牧諸民族に関するプロソポグラフィ研究

長沼 秀幸 東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程
(現 日本学術振興会 海外特別研究員)

本研究は、18世紀後半から19世紀中葉までの時期を中心に、ロシア帝国統治下の遊牧諸民族に関する基礎的なデータ収集およびそれらのデータベース化を行う基礎研究である。特に、筆者がこれまで研究対象としてきたカザフ人に焦点を当て、公刊史料や未公刊史料の収集・整理を通してデータベース化を行う。現存する史料に登場するカザフ人は、在地社会において影響力をもったエリート層（チンギス裔を中心とした貴族層および各部族を率いる首領層）であることが多い。本研究では、ロシア語史料に出てくるカザフ人エリート層に焦点を当て、そのような人々に関する可能な限り多くの情報をデータベース化することを目的とした。ロシア語史料に現れ出るカザフ人の個人情報と、彼らの地理的な分布を整理することによって、18世紀後半から19世紀中葉までのロシアのカザフ支配の在り方に、部族や家系といった要素が大きく作用していたという事実が明らかとなった。今後は、考察対象とする時期をより広く設定し、同様の分析手法を用いて、ロシア・カザフ関係の展開を包括的に分析していきたい。

妖怪の登場する縁起説話の研究 —韓国清平寺の相思蛇説話の事例を中心に

朴 美暎 京都大学文学研究科 非常勤講師

本研究ではまず、韓国の春川地方に所在する清平寺が舞台となっている相思蛇説話の内容について、古文献や1980年代以降に採話された資料をもとに、その特徴を紹介した。日本における蛇説話研究には既に豊富な蓄積があるので、それを踏まえて日韓の蛇説話の比較研究を進めることが今後の課題である。

また、清平寺の相思蛇説話に付随して語られている寺の焼失に関する言説に注目して、植民地時代の春川地方が置かれていた時代性や地域性がその言説に与えた影響について考察した。説話の語り手は歴史学者ではない普通の人々であるから、その内容には事実とは異なる出来事や非科学的・非論理的な創作が混ざり込んでいくものであるが、そのなかにこそ、説話を語り継ぐ人々の生活、歴史、価値観、欲望が反映されている。本研究では、清平寺の焼失に日本人が関わっていたという事実とは異なる言説が見られることを確認したうえで、そうした言説が成立し語り継がれるに至った背景には、植民地時代の地域や寺院への弾圧や、日本人による上からの文化財保護政策や、朝鮮戦争の戦禍や、その後の軍事的緊張など、韓国近現代史のなかでの春川地方の人々の歩みが反映されていることを、様々な資料に基づいて明らかにした。

中央アジア出土ソグド文字とバクトリア文字資料の解読

ベグマトフ・アリシエル 京都大学文学研究科 博士後期課程

本研究では、中央アジアで出土した、ソグド文字及びバクトリア文字資料の分析を行った。この研究の意義は、従来、個別になされてきた文字資料の解読や解釈を、図像資料、遺物、出土状況と結びつけて、総合的に考察、分析した点にある。

本研究で扱った文字資料は、主に1930年代にタジキスタン西部から発見されたムグ文書と、ウズベキスタン・サマルカンド市付近に位置するカフィル・カラ遺跡から近年出土した封泥や貨幣である。ムグ文書は、中央ユーラシアの諸言語に照合すると、先行研究の解釈が誤りであることが分かる。例えば、宝石に関する文書とされてきたものは、織物に関する文書と考えざるを得ない例などがある。

カフィル・カラ遺跡から出土した封泥の分析では、その図像にギリシャやイラン、更には突厥からの影響が見られるなど新たな発見があった。本研究成果はシルクロードにおける東西文化交流の実態解明に貢献するものである。

遠く離れたアフガニスタンやパキスタン北部でも、カフィル・カラ遺跡のものと同様の図像や銘文が刻まれた封泥が見つかるが、両地域に共通する歴史的背景について、現在考察を進めている。昨年、筆者を含む調査隊によってカフィル・カラ遺跡から発見された板絵は、この解明の重要な手がかりとなるものである。

中国西部客家の実態化を巡る人類学的研究 —アイデンティティの変容とその技法の解明—

星野 麗子 総合研究大学院大学文化科学研究科 博士課程

本研究は、経済発展を経た今日の中国において、人々の帰属意識がどのように変化しているのかを、中国西部の四川省に居住する客家人のアイデンティティの変容を対象に、人類学的研究方法を通して考察することである。

三島海雲記念財団の研究助成を受け、2017年7月から2018年6月までの間に、四川大学を中心に、四川の文化や歴史、地理に関する文献資料や地方新聞、客家研究に関する文献資料を収集することが出来た。また、85%が客家の人口を占めている成都市龍泉驛区洛帶鎮を研究対象地に、参与観察、聞き取り調査などを含むフィールド調査を行い、現地資料や民族誌的データを広く収集することができた。

上記の現地調査の一部の成果をまとめ、2017年8月6日には、中国青海省西寧市・青海民族大学で開催された第16回中国人類学シンポジウム（第16回人類学高級論壇）で、「移動とエスニシティ：江西と四川客家人の人類学的研究（「迁移与族群性：江西与四川客家人の人類学研究」）」と題した口頭発表を中国語で行った。

今後は、村から都市へと人々が移動し、生活習慣の変化が著しい中で、客家人の間で帰属意識のみならず、慣習や伝統がどのように維持、伝承、変化していくのかを引き続き考察していきたい。

東南・南アジア原産の色材藤黄の色素と分解物の解明 —元来の色の継承を目指して—

毛利 千香 Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution
Conservation scientist
(現 富山大学和漢医薬学総合研究所 特命准教授)

色材の性質や特徴を知ることは、その色の保存のために必須である。その中でも高エネルギーの光を吸収する黄色は退色が容易であり、そのため黄色の保存は絵画等の保存に直結する。藤黄は、東南アジア、南アジアに生育するフクギ科フクギ属植物の樹脂に由来し、世界各地で美術品等の着色に使用されてきた黄色色材である。その形態と色素成分は東南アジア、南アジア間で異なる特徴があることから、本研究では、カンボジア、タイ、スリランカの現地調査から、産地や収穫方法等の情報収集を行い、かつフクギ属植物の中でも樹脂が黄色を呈する29種70サンプルの色素成分を分析し、形態と色素成分に与える要因を調査した。その結果、東南アジア産藤黄に特徴的な成分を示したのは、既知の原植物であった *Garcinia hanburyi* のみであることが確認され、東南アジアでの産地の1つとしてタイ並びにカンボジア国境にわたるタイランド湾東岸が明らかになった。また南アジア産藤黄の形態である涙滴型は、樹皮上に自然滲出、固化した樹脂に由来するためであった。南アジア産藤黄の成分は、*G. morella* とミャンマー産 *G. elliptica* から検出された他、文献に未記載の藤黄原植物として、*G. mangostana* の可能性が示唆されたことは興味深い。

東アジア所蔵近世写本による日中古辞書の書誌学的研究

李 媛 北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程
(現 京都大学日本学術振興会 外国人特別研究員 (PD))

本研究は、東アジア所蔵日本古辞書（『篆隸万象名義』、『新撰字鏡』、『類聚名義抄』）と中国古辞書（原本『玉篇』残巻）の近世写本を対象に、文献調査・資料蒐集をし、これらの日中古辞書の書誌学的研究を行い、本文研究に資することを目的とするものである。

筆者は2017年度の文献調査で、宮内庁書陵部図書寮、京都大学附属図書館、中国国家図書館古籍館、国立故宫博物院文献館、国家図書館善本書室に所蔵される『篆隸万象名義』、『新撰字鏡』、『類聚名義抄』の近世写本15種を閲覧できた。

これまでに古辞書近世写本についての研究は、所蔵状況や基本的な書誌に限られ、詳細な報告がなく、さらに書誌研究1、2) 以外にほとんど重視されず、近世写本を利用した本文研究は皆無であった。本研究は文献調査により入手できた資料によって本文校正を行い、それを改善するものである。従来の研究では古写本古辞書の虫損等で判読できない箇所は、関連文献を参考にして推測するしかなかった。近世写本は修繕前の古写本古辞書の内容反映し、そして虫損や紙質の変容がさらに進む前の状態も確認できるため、古写本古辞書の判然としない箇所の判読に参考になることを明らかにした。文献調査による古辞書本文研究は肝要なテーマであるため、都合で閲覧できない近世写本について、今後も調査を続行したい。